実践のまとめ（第２学年　英語科）

阿賀野市立笹神中学校　教諭　細野　泉

１　研究テーマ

個人でのインプット活動と、クラスメイトとアウトプットを振り返る活動を通して自分の思いを伝えることができる生徒の育成

２　研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

当校の２年生は、音読や単語練習など見通しがもてる活動には意欲的に取り組むことができる。また、興味関心がある場面・状況を設定した活動にも積極的に取り組む。しかし、知識・技能の定着が不十分なため、自分の伝えたい内容をどのように英語で表現することができない生徒が多い。そして、知識が足りないため、パフォーマンステストやsmall talkを行っても、客観的に自分や周りを評価することができず、よりよい表現方法を目指したり、探したりすることができず、英語の学習が深まらない。また、自分の授業を振り返ると、集団の中間層をフォーカスしており、個に対応した指導が不十分であった。

学習指導要領（平成 29 年度告示）には、「外国語による見方・考え方とは、外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、情報を整理しながら考えを形成し、再構築すること」とある。上記のようなコミュニケーションを行うには、単語・文法に加えどのように日本語から英語に表現すればいいかといった知識・技能が必要である。また、コミュニケーションを行うというアウトプットの活動には、十分なインプットが必要になってくる。十分なインプットを個人活動で行った上で、アウトプットを繰り返すことで、自分や相手を客観視しより豊かな表現ができると考え本テーマを設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

①　帯活動を使った個人のインプットの時間の設定により個に応じた学びを保証する

２年生は知識が十分身に付いていない層が多いが、そのレベルにもばらつきがある。知識をインプットし、技能として使えるようになるには一斉の指導ではなく、個に応じた指導が必要である、と考える。また、家庭学習でのインプットができるようになるためにも、授業で型を示すことが有効だと考えた。帯活動として Google Classroom やロイロノートなどＩＣＴを活用し、レベル別のチャンレンジ課題に取り組めるようにする。また、チャレンジ課題で身に付けた内容がアウトプットできる場面を設け、生徒が表現することへの抵抗感を低くすることで個に応じた指導とする。

②　自分の表現方法を広げられる言語活動

単元のゴールに関連したトピックのsmall talkをペアで行う。タブレットを用いて、自分の表現方法を確認し振り返る時間を設定する。その際、ルーブリックを提示し、自分自身を客観視できるようにする。また、ペアの発言や表現方法などから真似したいものを蓄積できるワークシートを用意し、表現を深められるようにしたい。ペアを変えて何度も行うことで、生徒が自身の表現の変化を感じられるようにする。

(3) 研究テーマに関わる評価

① 抽出生徒の変容の見取り

英語の得意な生徒、中間層の生徒、苦手な生徒それぞれ１名ずつ抽出し、動画を比較して、自分の考えを伝える表現方法や話す分量やその内容が増え深まったかを見る。

② 授業アンケート

生徒の授業アンケートで、単元当初よりも話すこと（発表）について肯定的な評価が増えているかを見る。

３ 単元と指導計画

(1) 単元名

Lesson５ Things to Do in Japan（NEW CROWN２　三省堂）

(2) 単元（題材）の目標

ＡＬＴの出身国の友人が、日本に訪問する。訪問する場所の候補３つの中で、迷っている。家族には中学生の子どもいるので日本の中学生の意見を聞いてみたい。ＡＬＴの友人のために、自分が選んだ場所の良さを情報や自分の気持ちを含め英語で伝えることができる。（話すこと［発表］）

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
＜知識＞ 形容詞・副詞の比較級、同等比較を用いた文の構造を理解している。 ＜技能＞ 比較級や同等比較の文法を用いた英文の内容を聞いたり、読み取ったりする技能を身に付けている。 好きなことについて、比較級と同等比較を用いて自分の気持ちや考えを即興で伝えあい、正確に書く技能を身に付けている。	ＡＬＴの友人のために、おすすめの場所を事実や自分の気持ち、考えなどを整理し、簡単な語句や文を用いて話している。	ＡＬＴの友人のために、おすすめの場所を事実や自分の気持ちや考えなどを整理し、自らを簡単な語句や文を用いて伝えようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画　（全９時間、本時９／９時間）

次 (時数)	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1 （８）	・比較級・同等比較の文法を理解 ・本文の内容理解	◎自分の好きなもの・人について、事実や自分の思いを含めて伝えることができる。	
2 （１）	・相手の望むことを意識して、自分の考えや気持ちを伝えることができる。	◎ＡＬＴの友人の訪問先の候補地の中から１つ選び、なぜその場所を選んだかを、事実や自分の思いを含め伝えることができる。	◎ＡＬＴの友人の訪問先の候補地の中から１つ選び、なぜその場所を選んだかを、事実や自分の思いを含め伝えることができる。【発表の動画】

４　単元（題材）と生徒

(1) 単元について

ＡＬＴの友人が日本へ旅行する際の訪問先に迷っており、「３つの候補地の中から１つ選んでほしいというリクエストにこたえる」といったゴールを設定する。その際、ただ理由を述べるのではなく、ＡＬＴの友人の実態を考えどのような場所がいいのかを考えさせる。また、候補地が３つある中でなぜその場所を選んだのかを、具体的に自分の気持ちを含めることでより相手に配慮した説明ができるということに発表を繰り返す中で気づかせる。この単元では長さや高さといった事実を比べることや、美しい・重要など概念を比べることを学ぶ。本単元の文法である比較級が魅力的で説得力のある説明に有効な表現方法であることを生徒から引きだせるようにする。

(2) 生徒の実態

日常のあいさつや音読などパターンが決まっていることなどには安心して大きな声で取り組むことができる。分からないところを聞いてきたり、自分を表現したりすることが好きな生徒も多い。また、ペアやグループで活動することにも積極的である。しかし、英語を苦手とする生徒がほとんどである。１年生の既習事項（３単現・過去形など）が分からない、重要単語が分からない（書けない・読めない）といった生徒が非常に多い。その中でも個人差も大きいため、１時間で満足する学習ができる生徒が少ない。「話すこと［やり取り］［発表］」には苦手意識をもつ生徒は少ない。しかし、表現方法が限られており、同じ語句や文法だけでとどまっている。型を示さないと、どのように表現していいかが分からない生徒が多い。

本実践で、生徒が、レベル別のチャレンジ課題で知識量を増やすことをねらうとともに、その知識がアウトプットできる活動を継続していく。自分の表現が増えていくことを実感させて、英語で表現する楽しさを生徒にもってほしい。

５　本時の展開　（令和５年10月24日実施）

(1) ねらい

３つの場所から自分のおすすめの場所を選び、その良さを伝えることができる

(2) 展開の構想

動画とルーブリックを使い、相手（ＡＬＴの友人）に伝えるべき内容が含まれているか自分で確認し修正する。相手からもフィードバックをもらい、表現方法を深める。相手の表現から自分も使いたい表現をワークシートに記入し、次のペアとのやり取りで生かせるようにする。

(3) 展開

時間（分）	学習活動	◎教師の働き掛け	□評価○支援◇留意点
導入 20	○レベル別課題 ○グループで北海道と沖縄、旅行に行くならどちらがいいかと質問にロイロノートで答える。（Warm-Up） ○課題の確認（東京大阪新潟から１つ選び、理由を説明する）。	◎意見を伝えるにはどのような内容、組み立てがいいのかを生徒の発言をもとに全体で考える。 ◎意見・理由・それをサポートする内容が含まれていると、相手は納得できるということに気づかせる。	○生徒の最初の内容と、全体で考えた内容を比べ、生徒が考えやすいようにする。 ○生徒とのやり取りの中で比較級を使った文を提示する。
	相手（ＡＬＴの友人）の希望を考えて、おすすめするにはどうすればいいか。		
展開 5	○自分が選んだ場所について説明する。（タブレット録画）	◎条件を確認する。	
10	○内容確認（ルーブリック確認、ワークシート記入）	◎どのような内容になっていればよいか生徒に気づかせる。 ◎生徒が言いたかったが、言えない表現をどのように伝えることができるか考える。	◇ペアで確認が難しい場合は班で行う。 ○生徒とのやり取りの中で、比較級を使った文を提示する。
5	○自分が選んだ場所の説明（ペアを変える。タブレット撮影）		
まとめ 5	○振り返り記入		○最初の発表とどのような変化があったか書けるよう支援する。

(4) 評価

・ＡＬＴの友人のために、候補地を１つ選び、その土地の良さを情報や自分の気もちを含め伝えることができる。

６　実践を振り返って

(1) 授業の実際　（指導の実際）

①　比較級・同等比較の文法理解（第１次）。

ターゲットの文法を導入し、生徒は文法のインプット活動と、文法を使ったアウトプット活動を繰り返し行った。アウトプットでは、生徒にとって身近なものを比較級、同等比較を用いて表現させた。導入した文法だけを使うのではなく、詳しく説明したり、自分の気持ちを伝えたりするよう指導した。単元のゴールと似たトピックスをsmall talkで行った。自分の表現方法だけを振り返るのではなく、ペアから真似したい表現方法を書き留める時間を設けた。

また、帯活動中に、レベル別の課題を用意した。生徒は自分でレベルを分け、課題に挑戦する。レベル１は、比較級の基礎的な表現をヒントがある状態で口頭練習する課題、レベル２は、レベル１よりヒントが少なく、さらに自分で意見を考え伝えることを目的とした課題である。生徒は伝えたい気持ちや考えがあっても、表現方法を知らないため、使うことができない。また、家庭学習など、１人で復習できるように帯活動で大量のインプット活動の時間をとった。

②　ＡＬＴの友人のために、おすすめの場所をスピーチする（第２次）。

初めに、見通しをもたせるため北海道と新潟のどちらがいいか、またその理由は何かを班で考えさせた。全体で理由を共有し、意見を伝えるにはどのような内容・組み立てがいいのかを生徒の発言をもとに全体で考えた。その後、本時の課題（ＡＬＴの友人に、東京・大阪・新潟のどこがおすすめかを伝える）を提示し、個人で取り組んだ。スピーチをタブレットで撮った後に修正し２回目のスピーチを行ったが、前段の班活動に時間がかかりすぎたため、ペアで内容を確認し個人で修正する、という活動を１時間の授業内に行うことができなかった。そのため、もう１時間追加し、ペアでルーブリックに合った内容であるか、相手を意識した内容かを話合い、自分の発表内容を修正できるようにした。アドバイスを基に修正し、スピーチをタブレットで撮り直した。

(2)　研究テーマに関わって

表１

① １回目のスピーチと比べて、自分の考えを伝えることができた。				
評価	よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった
人数（%）	12（60）	６（30）	１（５）	１（５）
② 相手（ＡＬＴの友人）を意識するに工夫をして伝えることができた。				
評価	よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった
人数（%）	10（50）	９（45）	１（５）	０（０）
③ パートナーのスピーチを聞いて自分の内容に取り入れた。				
評価	よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった
人数（%）	９（45）	７（35）	３（15）	１（５）
④ 比較級のレベル別の練習をして、比較級を身に付けることができた。				
評価	よくできた	できた	あまりできなかった	できなかった
人数（%）	９（45）	７（35）	４（20）	０（０）

①「１回目のスピーチと比べて、自分の考えを伝えることができた」では、肯定的な評価が 90%、否定的な評価が 10%であった。ほとんどの生徒が１回目のスピーチよりも自分の考えを深めて伝えることができた。（表１）

② 「相手（ＡＬＴの友人）を意識する工夫をして伝えることができた」、では肯定的な評価が 95%、否定的な評価が 5%であった。ルーブリックを明確にしたこと、相手が求める情報を詳細に生徒に伝えたことが結果に繋がったと考える。否定的な生徒も、相手が求める情報をもとに、スピーチ内容を考えることができていた。（表１）

③ 「パートナーのスピーチを聞いて自分の内容に取り入れた」、では肯定的な評価が 80%、否定的な評価が 20%であった。これは、ルーブリックだけでは生徒がどのような表現を取り入れればいいかが分からない、ということを表している。（表１）

④ 「比較級のレベル別の練習をして、比較級を身に付けることができた」では肯定的な評価が 80%、否定的な評価が 20%であった。今回はレベルを２つに分けたが、３つに分けることでより多くの生徒に対応できると考える。（表１）

生徒の発表内容から抽出生徒の変容について見ていく。英語の得意な生徒、中間層の生徒、苦手な生徒それぞれ１名ずつ抽出し、動画を比較して、自分の考えを伝える表現方法や話す分量やその内容が増え深まったかを見た。得意な生徒は、１回目のスピーチでは、その場所の紹介のみであった。しかし、最終的なスピーチではその場所で相手ができることなどを紹介し、相手の立場になって伝えることがきた。中間層の生徒は１回目では安田アイスクリームについて説明していたが、最終的に“Yasuda ice cream is the most delicious.”といい、最上級を使って紹介するもののよさを他と比べて説明することで、より説得力を増して伝えることができた。苦手な生徒“Asaino shrine is beautiful.”と１文でしか説明できなかったが、“Niigata is good. You can take pictures.”と説明することができた。また、文法は間違っているが、新潟には白鳥がいて餌をあげることができる、と内容を膨らませて表現することができた。

(3) 今後の課題

① インプットと言語活動の時間の充実

帯活動でレベル別課題を行うことで、80%の生徒が比較級を身に付けることができたと実感した。英語に苦手意識をもつ生徒が多いため、十分なインプットの時間を確保することは必要である。しかし、ゴールを見据えた言語活動を段階的に設定することで、生徒は初めて英語を使えるようになる。単元の最初はできなかったが、最後にはできたと実感できるようバックワードデザインでゴールを設定し、インプットと言語活動を効果的に行う必要がある。また、既習事項をスパイラル的に使える機会も設定し、生徒の表現力がその単元だけではなく、長く使えるものにしていきたい。

② 明確で効果的な振り返り

相手の表現のどの部分が自分にとって有効なのかが分からない、英語で相手が何と言っているかが分からない、と振り返りに上手く参加できない生徒がいた。話し合い方の good model と bad model を示し、振り返り方のデモンストレーションを示す必要があった。また、基本的な英語の力が身に付いていない生徒も多く、パートナーが何を言っているかが理解できないことが今回に限らず多くある。その場合、日本語で内容を確認するなど英語の思考・判断・表現ができる状況になっていない。パートナーと振り返る場面を繰り返し設定し、なぜ振り返りが重要なのか、どのような振り返りが有効であるかを生徒に指導していくことが必要である。また、振り返りの中で生徒が使いたいと思った表現を書き留めることも継続して行い、確認しながら表現力を身に付けていく必要がある

＜参考・引用文献＞

文部科学省.『中学校学習指導要領(平成29年度告知)解説　外国語編』.開隆堂出版.2017